

恐山から

森谷 勝

田名部へ着いたのが夕方の5時45分だった。

8月というのに時々薄日しか射さないどんよりと雲がたれこめた、寒々しい海岸線を作り抜けてきたのだった。大湊線は野辺地から陸奥湾の海岸を走ってくる。海は黒くうねっていた。鈍色の雲は、熱く薄く重なりあい、水平線まで続いている。少しも明るい所がない。鳥肌の立つよううすら寒さだった。海岸には人影も見えず、砂浜は湿っていた。単調な振動と共に走り去るものは、こうした景色と、ところどころの末の林の緑だけだった。こんなに寂しいのは、北の国だからだろうか。僕のせいなのだろうか。駅前に商店とてあまりない小さな駅に止まると、二、三人の人が降り、また二、三人の人が乗り込んでくる。乗降口の壁によりかかって、僕はぼんやりとこんな景色や、人を見ていた。全てが無彩色の世界に沈んでいるように思えた。老婆が二人乗り込んできて、大きな荷物を脇へ置くと、体中何か生臭い匂いをさせて話し込み始めた。その顔は無数のしわに刻まれていた。手拭いを被ったその老婆たちの話しは、大きな声ではあるが、訛りのためにまるで外国語のように思えた。

大湊線は野辺地から大畑までの線である。もちろん単線であり、田名部へ行くには、野辺地から下北を経て大湊へ行き、そこから元の線を下北まで戻って田名部、さらに大畑へと通じるのである。大湊へ着いたときは、行き先を間違えたかと思った。

大湊はかつての軍港で往時は軍艦が多数、出入りして活況を呈したという。

数分の停車の間、気動車から見た大湊は、くもった空の下に沈んでいた。駅のそばには海がきていたが、黒く濁っていた。岸壁には黒々とした、鉄骨がむきだしになった、倉庫のようなものが醜い姿をさらしていた。黒い空からは雨が降り始めた。

田名部から恐山まではバスが通じている。時刻表を見ると、最終のバスが10分程で出る。バスにはリュックを持った学生の旅行者と、子供を連れた老人という二種類に分けられるようだった。かなり混んでいた。補助席を出してそれへすわり、程なくバスは発車した。田名部の町はそれほど大きくはない、駅前に小さな広場があって、二、三の銀行のような建物があり、あとは小さな商店が並んでいる。それを抜けるとすぐに参道へ入った。道はややのぼりになっており、まもなく人家もない山道となった。バスにはガイド嬢が乗っていて恐山について説明を始めた。

恐山は下北半島の中央にそびえる円錐形休火山で、宇曾利山とも呼ばれる。火山の本体は溶岩流および砕せつ物からなる成層火山でその下部は石英粗面岩で上部は輝石安山岩である。山頂には比較的大きな火口があり、大尽山を主峰とする、いわゆる蓮華八葉と呼ばれる山々が火口壁を作っている。火口には宇曾理湖という火口湖がある。この山を一千年の昔、桓武天皇の御代、円仁が唐で修行中夢のなかで聖僧に「なんじ国に帰り東方行程三十余日のところに至れば靈山ありそこに仏道を弘めよ」と告げられた。そこで帰国の後諸国を探し、見つけたのが恐山だと言う。ここに寺を開いて恐山菩提寺とし、延命地藏尊を刻み安置したという。境内には、本堂、本殿、大師堂、薬師堂等があり、境内には、また火山の蒸気が噴き出し、さながら地獄の如き観を呈し、その数は丁度百八あるという。

参道には一町ごとに石の指導標がたっている。昔は、この指導標に励まされながら、徒歩で霊場目指して登っていったのだろう。何のためであろうか。信仰のためか、慰安のためか、今、徒歩で登る代わりにバスに揺られて登ってゆく僕は、何のために行くのだろう。同じような理由なのかもしれない。

もう、うっそうたる檜の美林が広がっていた。それは細かい雨にけぶった暗い陰鬱な景色だった。ガイド嬢が恐山温度を歌いだした。

火口に着き、バスは朱塗りの太鼓橋を横に見て、境内前に着いた。今、渡った川が三途の川で、もうあの世へ渡ったのだと言った。ゆっくりあの世を見物してきて下さいとも言った。

バスを降りて入山受付所に入山料を払って境内に入った。雨は今はこやみになっていた。寺務所で泊まるところを聞くと、向い側の建物を指した。その建物は、片側は畳の敷かれた長い部屋になっており、廊下を隔てて片側に簡単な炊事ができるような流しと棚がついていた。一番入口よりのあたりに学生の六人グループがカレーライスをつくっていた。その隣の少し空いたところにリュックを置くと外へ出た。もうあたりはかなり暗くなっている。腹が減ってたまらなかった。けれどもどこにも食べ物売っている様子は見えなかった。売店にはおみやげ品や絵葉書のようなものしか売っていない。やっとそこに腹のたしになるような、バターピーナッツと豆一番という豆菓子を見つけて買った。境内を歩きながら豆をほおばった。正面には地藏堂があり、そこへ続く石畳の道の両側には燈籠が並んでいる。右手へまがってゆくと、小さな建物があつた。そこは薬師の湯と尼染の湯という温泉である。あたりは、ブツブツと湯気を噴いていて、硫黄臭いにおいがたちこめていた。さきほどから何となくしっとりゆかないかと思っていた。それはこの境内には立木が一本もなく、火口壁の緑に対してここがいやに白っぽいということだった。だんだん闇に沈んでゆく周囲の景色のうちで、ここだけは白っぽく不気味に浮き上がっているといったふうだった。

豆だけをかじっていたのでは飽きてしまう。少しも満腹感がなかった。飢えというものがこんなに切実に感じられたことはなかった。それは全くさみしいといったものだった。暗くなった境内に立ってもう随分、黙っているなと思った。

この恐山では毎年7月21日から24日まで4日間おこなわれる祭典には各地から多くの人々が参拝するという。今はもうその時期を過ぎたから、境内には人の姿はほとんど見えなかった。その祭にはイタコと呼ばれる巫女が出て死者の口移しをする。そのために死んだ者の話を聞きに遠方からも人が集まる。

死者との対話、それは異様なものに違いない。死によって断絶された人間の間で話をするということは異様なものに違いない。そうでない人間の間での話しすらできないというのに。石仏が最後の薄明りの中で白く光っていた。そうしてそれは黙して語らなかった。何ものにも語りかけようとはしないようだった。

もう大分前のことだけれどひどく学校に行くのも何をするのもいやになったことがあった。学校をさぼって新宿の繁華街を歩き回ったことがあった。そこに渦巻く雑踏のなかで、ぶつかりそうになる人混みのなかで自分だけ一人何か透明なビニール膜を被って回りから隔てられているような感じがした。周囲のざわめきは聞こえてくるが、こちらの話は虚しく響くだけ、そんな感じだった。人との話が単なる遊戯でしかない感じだった。

もう全てが闇のなかに沈んでいた。常夜燈だけが光っている。また空腹感がおそってきた。宿泊所に戻ると学生たちのグループは食事も終えて、明日の予定を地図を拡げて話し込んでいた。反対隣には。老夫婦とその孫らしい子供が二人丁度食事を終えて、あとをかたずけているところだった。食卓も茶碗もあり、もう長いこと滞在しているらしかった。二人の子供は、追いかけてっこをしたり、組んずほぐれつの取っ組み合いをしたりしていたが、それにあきると絵本を見だした。それは仏の話とか地獄の絵が書いてある絵本であった。寝袋を出して横になった。

8時頃、石けんとタオルを持って温泉に入りに行った。この境内には夕方見た、温泉とさらに二つの浴場がある。古滝の湯と冷抜の湯である。一番近い古滝の湯に入った。浴場は更衣室と浴槽のある板敷きのたたきに分かれており、そのおのおのに裸電球が一つ点いているだけで薄暗かった。硫黄のにおいがする黄白色の湯に体を沈めた。

一体対話とはなんだろう。遠く家から離れて、一人で白い湯に体を沈めていると実感として何かが体のうちで叫んでいるようだった。そんな声を聞きながら思いきり湯船の中で体を伸ばした。疲れていたのかもしれない。精神的にまいっていたのかもしれない。外はまた

雨が降りだしたらしい。屋根がかかるい音を立てていた。体をざっと洗うともう一度浴槽に体を沈めた。他に誰もいないので、狭くない浴槽のなかを泳いでみた。

昔はもっと信じていたのに、そう思った。甘えがあったのかもしれないが、ただ闇雲だったかもしれないが信じていたのにと考えた。今は修飾がすぎたのかもしれない、それがあの膜なのかもしれないとも考えた。

外へ出ると湯上りに細かい雨がひんやりと気持ちよかった。空は黒く、周りの山も黒く、ここだけがやはり白っぽく浮き上がっているように思えた。暗黒のなかに僕を包んで、ここだけが漂っているように思えた。宿泊所へ戻ると学生のグループは各自寝袋を出してもう寝ていた。老夫婦と子供たちも蚊帳をつつてそのなかで何か話していた。寝袋のもぐり込むと目をつむった。

人間は互いに理解できないという絶望感が頭を把らえて離さなかった。以前自由ヶ丘の町のなかで一匹の蝶を見たことがあった。キアゲハであったが、洋装店のショーウィンドウにしきりとぶつかっていた。おそらくガラスに映った青空と街路樹をめがけていたのだろう。ぶつかってはヒラヒラと少し落ち、又ぶつかるという虚しい試みをしていた。人間も互いに虚像を見ているのではないだろうか。たとえガラスを打ち破ったとしても、その向こうには何もないのではないだろうか。そんなとりとめもない考えが頭のなかをグルグル回して眠っていた。

眠ってまもなく、ドンドンというトビラをたたく音がした。懐中電灯の光が闇のなかを横切ってゆく。夢ではなかった。男の声がして自動車を持っている人はいませんか、と何度も言っていた。蝮にかまれたので下の町まで車で運びたいのですが、という声が又した。やがて一番奥の隅から誰かが起き出してきた。二人で何か話しながら出て行った。またもとの静寂に帰った、誰だか知らないが間にあうといいなと一瞬思った。ふとしたことであの人たちが知り合うだろうと思った。いつしか眠っていた。翌朝明るくなるとすぐ眼がさめた。寝袋のなかでうつらうつらして六時頃起きた。雨はまだ降っていた。空腹だった。昨日の豆の残りをかじりながら外を歩き廻った。百八あるという地獄を見てまわることにした。

しかしそれはどれも同じようなもので、色々な名前がついているがどれもただ黄白色に染った岩がゴロゴロしていて所々から蒸気が上がっているだけだった。けれど白い岩々は妙にガサガサした無遠慮さで広がっていた。ほうぼうに小石の塔があり、賽の河原にはたくさんあった。雨の中でそれらの小石の塔は濡れていた。

宇曾理湖の水は青かった。静かに雨にけむっていた。背後にあるガサガサした岩と違って

落ち着いた美しさだった。僕はぼんやり岸边に立っていた。目の前にある杭に一羽のトビが止まっているのを見つけた。茶色の羽を雨に打たれて、しかし悠然と羽づくろいをしていた。その姿は孤高で美しいとさえ思えた。やがて彼はゆっくりと、しかも確実に飛び立ち水面を低く飛び去った。

腹が減っているのを思い出したし、僕は下山することにした。もういいような気がしたし、だれか知った人と喋りたいと言う気持ちがあった。

帰り道は雨がザアザア振りだった。

注：原文のままですが、読みやすくするために段落ごとに空白の行を入れました。また、明らかな脱字と誤字（温を湯に）は訂正しました。